

保育者養成校と附属幼稚園との連携のあり方に関する研究
—教育実習事前指導重点化のための試みを通して—

杉原 徹^{1*}, 小島一久²

A Study of the Way of Cooperation between a Nursery Teacher Training School and a Kindergarten Attached to the School: Through a Trial for Putting Emphasis on the Prior Guidance on Teaching Practice

Toru SUGIHARA^{1*} and Kazuhisa OJIMA²

Abstract: To search for a way of the effective guidance to students on nursery teacher training, authors tried to put emphasis on the prior guidance on teaching practice. From April to May, 2009, 4 groups in pairs practiced study classes in Kochi Kindergarten (a kindergarten attached to this junior college). Their comments after teaching practice told us that they could have made good use of their experiences at Kochi Kindergarten. To continue the trial of study classes, authors must reflect on the details of the trial this year, and deeply discuss how to build the plan to practice study classes with teachers at Kochi Kindergarten. And at the same time, both authors and teachers at Kochi Kindergarten must think what kind of images toward nursery teachers should be aimed at. Building the common nursery teacher image may form the basis of cooperation between a nursery teacher training school and a kindergarten attached to the school, and lead to the effective guidance on nursery teacher training.

Key Word: A Kindergarten Attached to the University · Prior Guidance on Teaching Practice · A Study Class · Nursery Teacher Image

1. はじめに

附属幼稚園をはじめとする附属保育施設を持つ保育者養成校には、効果的な保育者養成指導を行うために、附属保育施設とどのように連携

を図るのかという共通の課題がある。実習先として、また授業の一環として学生が幼稚園に出かけ、子どもたちと関わり、幼稚園の教員の指導を受ける。例えば、そのような学生に対する教育協力が考えられる。これは附属保育施設を

^{1*}〒780-0955 高知市旭天神町292-26

高知学園短期大学 幼児保育学科. E-mail: sugihara@kochi-gc.ac.jp

Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College, 292-26 Asahi Tenjin-cho, Kochi 780-0955, Japan.

²〒780-0955 高知市旭天神町292-26

高知学園短期大学 看護学科. E-mail: ojima@kochi-gc.ac.jp

Department of Nursing, Kochi Gakuen College, 292-26 Asahi Tenjin-cho, Kochi 780-0955, Japan.

持つほとんどの保育者養成校でなされていることであろう。学生が子どもたちと実際に触れ合い、関わる場がある。そして、現場の教員のアドバイスを受ける機会があるということは、保育者養成校にとって大きな強みであることは間違いない。

ただし、附属保育施設との連携にあたって、理念を明確にし、計画性を持った取り組みにまで発展させようと試みている保育者養成校は極めて少ない。数少ない試みとして注目されるのは、お茶の水女子大学の取り組みである。附属幼稚園と附属保育所を持つお茶の水女子大学は、平成18年度より「幼保の発達を見通したカリキュラム開発プロジェクト」を4カ年計画でスタートさせた。0～5歳児の発達を見通した、連続性のある「保育者養成」カリキュラムを、附属幼稚園・附属保育所・大学の三者協働で研究開発する体制を構築しようとするプロジェクトである^a。

ところで、お茶の水女子大学では「保育者養成」といっても資格としては幼稚園教諭のみであり、現在保育士資格を取得できるカリキュラムは用意されていない^b。国の幼保一元化政策の流れの中で、保育者養成課程といえば幼保双方の資格取得可能なカリキュラムが主流であり、その意味でお茶の水女子大学における「保育者養成」の概念の独自性がうかがえるが、そこには以下のような考え方があ

「幼保の資格を併有しようとする、実習を含む必要最低限の科目を履修するだけでも、四年間の学生生活の自由度はかなり制限される。本来、子ども理解に裏打ちされた実践力を備えた保育者になるためには、保育だけではなくい

ろな分野への関心や見識を広めて、人間的な厚みを少しでも育てておくことが重要となる。また、お茶の水女子大学の特性として、保育関連のキャリアを目指す場合に、幼稚園・保育所などの現場だけではなく、国家・地方公務員、保育系産業、NPO法人などに就職する者も多いということも考慮しなければならない。」(佐治・浜口, 2007)

こうしてお茶の水女子大学は保育士資格取得のためのカリキュラムを用意するという方向には向かわず、独自の「保育者養成」コンセプトを追及するのである。そこで興味深いのは資格取得に限定されない「総合的保育者」という保育者像である。プロジェクトメンバーの1人塩崎美穂(2007)によれば「総合的保育者」とは次のような保育者像を指す。「総合的保育者」としては、まずは、幼保それぞれの保育機関の実践史を踏まえ、「保育」に対する現代の社会的要請に熟知し、見通しをもった日課やカリキュラムを編成し、子どもや保護者と連携しながら行う通常の保育実践そのものができる人を想定している。」

このことが「総合的保育者」の前提となった上で、「幼保の連携、幼保を一体的に運営する場合の総合的な日課やカリキュラムの開発、保育制度の見直し、家族を支える子育てネットワークの構築など、「保育」にかかわるさまざまな領域をコーディネートする力量が付加される。家族がセーフティネットとはならない時代には、子どもを守る人が社会の隅々に配置される必要が出てくるだろう」と述べられる。単なる資格保持者ということではなく、「子どもを守る人」としての保育者像が述べられている。

^aプロジェクトの概要については、浜口・佐治(2006)に詳しい。

また、同プロジェクトについてホームページも作成されている。

「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発」(<http://www.cf.ocha.ac.jp/youho/report.html>)

プロジェクトの主なメンバーは、同プロジェクトのために着任した講師2名、保育士1名、同プロジェクトに関わる大学教員5名、附属幼稚園教諭、附属保育所保育士、大学院生数名である。あわせてお茶の水女子大学の附属保育施設を紹介しておくと、附属幼稚園は同大学の敷地内にあり、3～5歳児が約180名在籍している。また、附属保育所(名称は「いずみナーサリー」)も同大学の敷地内にあり、0～2歳児が10名前後(定員は18名)通所している。

^bかつては保育士養成課程が存在していたようだ。現在、保育士資格を希望する学生は保育士国家試験によって取得しているとのことである(浜口・佐治, 2006参照)。

ここまで見てきたお茶の水女子大学の取り組みの概要、附属保育施設との連携の模索を我々も参考にしていかなければならない。短期大学における幼保双方の資格取得のための保育者養成課程では、必要科目の履修で2年間日々追われてしまうという現状を打破することは難しい。しかし、附属保育施設と連携して、目指す保育者像を提起し、その養成にあたって両者が協力するという姿勢そのものは極めて重要であり、大いに参考にすべき点である。大学側が実習先、授業の場として附属保育施設を活用する際、単に一方的な協力要請でなく、両者が協力してどのような保育者を養成するのか構想していく双方向的な取り組みがあつてこそ、より効果的な指導となろう。そうした意味で、お茶の水女子大学の試みは重要な問題提起といえるだろう。

本学では附属幼稚園とどのような連携ができるのか模索しなければならない。高知幼稚園が現在の高知学園短期大学附属高知幼稚園と改称されたのが平成8年であった。その後、実習先として、その他さまざまな教育機会の場の提供を受けてきた。ただし、保育者養成にあたって双方が歩み寄って保育者像を提起し、理念を掲げ計画性を持った取り組みを継続的に展開させるにはいたっていないというのが現状である。

平成19年度に第一著者が実習担当者となり、学生の声を聞いていくうちに、本学では学外実習の中で2年次6月の教育実習が学生にとって特に大きな課題となっていることが明らかになってきた。教育実習をいかにして乗り越えるかは学生にとって大きな関心事項であり、それゆえ、大学にとっても事前指導のあり方が重要な課題となっている。特に、1年次2月に幼稚園観察実習を終え、教育実習が始まるまでの2年次4～5月の事前指導をどう構想するのかが、本学の实習指導上の大きな課題である。

その課題への取り組みとして、著者は附属幼稚園との連携を構想した。具体的には、教育実習で多くの学生が初めて体験することになる指導案作成から実践までの一連のプロセスを附属幼稚園との連携の下で事前学習することである。そして、こうした事前学習を通して大学の教員

と幼稚園の教員が保育者養成について意見交換する機会にできないか構想した。こうした構想を幼稚園側に提起し、平成20年度4～5月にかけて試験的に研究保育の取り組みを実施した。ただし、20年度は計画不備が多々あり、事前学習として不十分なものとどまった。21年度は20年度の取り組みを基本としながらも計画性の面で改善を図りながら実践した（改善点については21年度の計画の中で述べていく）。

本稿は21年度の教育実習事前指導重点化のための附属幼稚園との連携の実践記録である。学生のコメントとともに記録をまとめ、本取り組みの課題を見だし、効果的な保育者養成指導のために保育者養成校と附属幼稚園がどのように連携を図るべきか、その方向性を探ることが目的である。

2. 附属幼稚園との連携による平成21年度教育実習事前指導の実践記録

(1) 研究保育計画

平成21年度は毎週金曜日2限（B組33人対象）・3限（A組35人対象）を教育実習事前指導の時間とした。4月の初回の授業で観察実習の反省会を行い、2回目の授業で附属幼稚園での研究保育計画の概要について説明し、昨年度の取り組みの模様をビデオで見せた。

A・Bクラスからそれぞれ2人1組を2グループ募った。本来は1人で保育実践すべきところだが、昨年度同様十分な準備は時間的にみて困難であることが予想されるし、また1人でも多くの学生に体験してもらいたいという思いもあり、補助としてもう1人増やし2人で研究保育を実践することにした（なお、学生の選出に当たっては立候補制としたが、教育実習が附属幼稚園で予定されている学生については幼稚園側との相談の末、辞退してもらうこととした）。

また、幼児の姿を観察することなく指導案を作成し実践することは不可能である。学内での授業のカリキュラムを考慮し、登園から昼食前までの半日観察実習を2回実施することにした。

その上で指導案を作成し、研究保育を実施することにした。昨年度は事前計画が不十分で時間割調整ができず、2回の観察実習を行うことができないグループが出てきてしまったので、今年度は必ず2回は確保できるように心がけた。

附属幼稚園の園長、教員と話し合った結果、4グループの担当クラスと観察実習・研究保育の日程は以下の通りに決まった。

<担当クラス>

- A1 グループ：年長あかばら組
(男児8名 女児14名 計22名)
- A2 グループ：年長しろばら組
(男児10名 女児12名 計22名)
- B1 グループ：年中あかゆり組
(男児14名 女児9名 計23名)
- B2 グループ：年長あかばら組
(男児8名 女児14名 計22名)

<実習日程>

- 4月27日(月) 登園から昼食前までの観察①
A1・A2 グループ
- 5月1日(金) 登園から昼食前までの観察①
B1・B2 グループ
- 5月8日(金) 登園から昼食前までの観察②
B1・B2 グループ
- 5月11日(月) 登園から昼食前までの観察②
A1・A2 グループ
- 5月22日(金) 研究保育B1・B2 グループ
- 5月25日(月) 研究保育A1・A2 グループ

4グループは観察実習を経験した上で研究保育での活動を考えた。各幼稚園には月案・週案が用意されており、本来実習生もそれを無視することはできないが、附属幼稚園側と相談の結果、昨年度同様実習生が自由に指導案を立てることとした。教育実習ならともかく、今回のような取り組みについては投げ入れ的な活動のほうが学生にとってやりやすいだろうという判断があった。

<指導案>

・A1 グループ

梅雨の製作活動。折り紙でカエルを作り、あらかじめ用意しておいた画用紙(4つ切り画用紙を4枚つなげ、しずく、あじさい、葉っぱなどを事前に貼っておいたもの)に貼りつける活動。指導案上の「ねらい」は「楽しい雰囲気の中で、友達と1つの絵を完成させるという充実感を味わう」「カエルや梅雨の季節の動物への関心を深め、季節感への関心を持つ」とした。

・A2 グループ

お天気ダーツ。保育室でダーツの矢を製作し、ホールに移動してあらかじめ作成しておいた「晴れ」「雨」「くもり」のゾーンが描かれた的を使ってダーツ遊びをする活動。指導案上の「ねらい」は「製作を通して満足感・達成感を味わう」「順番を守り工夫して遊ぶことを楽しもうとする」とした。

・B1 グループ

梅雨の製作活動。画用紙にあらかじめ用意しておいたカエル、傘、かたつむり、しずくの形の画用紙を自由に貼り付け、クレパスで模様や背景を描く活動。指導案上の「ねらい」は「製作活動に集中しようとする」「季節に関心を持ち、様々な表現を楽しもうとする」とした。

・B2 グループ

吹き絵の活動。画用紙に色水をたらしてストローで吹き、色を混ぜり合わせながら模様を描く活動。指導案上の「ねらい」は「自分の息で進んで描かれる色水の動きを予想しながら描くことで想像力を豊かにする」「色水同士が混ぜり合って出来る新たな色を発見し、色の不思議を感じ取ろうとする」とした。

研究保育の日程が梅雨の季節を間近に控えた5月末ということもあり、4グループともに「雨」を意識した活動を考えたようだ。実践前には指導案を下書きし、附属幼稚園を訪問して教員の指導を受けた。活動に必要な準備物(B1グ

グループであれば、画用紙で子どもの人数分のカエル、傘、かたつむり、しずくの形を作ることなど）については2年生全員が4グループに分かれて協力した。

また、研究保育当日は1グループに2人学生をつけ、1人が指導案チェック、1人がビデオ撮影を行った。

以下、各グループの実践を見て気づいたことに対しコメントしてみる。なお、B1・B2グループについては現場で研究保育の様子を見ることができたがA1・A2グループについては学生が撮影したビデオを通してのコメントである。

(2) 研究保育の実践

・A1グループ

このグループは活動の説明から子どもたちがカエルを貼り付け終わるまでの時間を30分として計画していた。ところが、実際は1時間近くかかった。カエルの折り紙を折る場面で子どもの個人差がはっきり現れ、「こう？」と折り方を質問する声があちこちであがり実習生2人が対応に追われ、予想以上に時間がかかったようだ。また、カエルを1枚の大きな画用紙（壁面）に貼り付ける場面では、5テーブルに4～5人ずつ座っていた子どもをテーブルごとと呼んで貼り付けさせていたが、このとき待っている子どもたちが騒々しくなってしまった。特に最後になったテーブルの子どもたちは待ちくたびれたようだった。あるテーブルでは子ども同士がケンカを始め、鼻血を出してしまい担任の教員の力を借りるシーンもあった。

幸いにも予定より早い時間から活動を始めることができたために活動を最後まで通すことはでき、終わりの時間は予定通りとなった。

総合的に見て、「ねらい」と実践に整合性を感じることはできたものの、保育を展開する上での工夫・準備が不足していたように思われた。

・A2グループ

保育室で製作活動をし、その製作物を使ってホールに移動してから遊ぶというのがこのグルー

プの活動の特色である。保育室ではチラシを丸め、その片側の端にペットボトルのキャップをくっつけてダーツの矢を製作した。そして、矢の先端部分（ペットボトルのキャップ）にガムテープを貼り、ダーツを的にくっつける準備をした。製作活動は流れも時間配分も指導案にそっており実習生の予定通りだっただろう。

ホールでは4グループにわかれそれぞれに用意された的を床に置き、的の中の「晴れ」「雨」「くもり」のゾーン目がけて子どもたちがダーツを投げた。何度も投げて粘着力が弱くなると実習生がガムテープを取り換えた。指導案ではこのあたりの援助について特に触れていないところを見ると、実習生はここまですぐに粘着力が弱くなるとは予想していなかったようだ。ガムテープの取り換えに2人とも追われていた。

やがてダーツ自体が折れ曲がってしまう子どもが複数出てきた。実習生の1人が子どもを数人連れて保育室に戻り、新たなダーツ作成を行うという臨機応変の対応を見せた。しかし、これは今回実習生が2人いたことで可能になることだっただろう。

子どもたちは最終的に的を自分たちで持ったり壁に立てかけたりして、いわば本来のダーツゲームをして遊び始めた。そのように展開することを実習生は予想していなかったようだ。子どもたちの遊び方の展開をより深く予想しておく必要があっただろう。

・B1グループ

子どもたちが製作活動を始めてから、全員の子どもが出来上がった製作物を乾燥棚に入れるまでに1時間を予定していた。製作活動開始15分後に子どもが乾燥棚に入れ保育室のコーナーで自由遊びを始めた。実習生は早く終わった子どもに対して「まだ製作中の子どもに当たらないよう声をかける」「まだ製作中の子どもが集中してできるように室内で静かに遊ぶように促す」という援助を指導案に書いており、実践していた。

しかし、次々に子どもが製作活動を終え、自由遊びを始めるようになると段々と騒がしくなっ

てきた。実習生の予想以上に子どもたちは早く活動を終えたようだ。じっくり取り組んでいる子ども、あまり興味を示さず手が止まっている子どもたちに実習生は関わっていくが、周囲の騒々しさに活動中の子どもたちの気が散ってしまう様子がうかがえた。周囲の騒々しさに対処することが難しく、また、完全に手が止まってしまう子どもが続出したことで、実習生は予定より20分程度早く活動を終えた。

総合的に見て、「ねらい」と実践の整合性は感じられた。しかし、活動を終えた子への対応については予想が足らなかったという印象がある。

・B2グループ

このグループは活動の導入として「魚がはねて」という魚をモチーフとした手あそびを行ったが、これは指導案には予定されていたものではなかった。直前になって思いついたようだ。結果的にはこれが幸いし、続いての『あめあめあそび』の絵本（新沢，1991）^cの読み聞かせまでを通して子どもたちに「雨」のイメージを持たせることができたようだ。吹き絵の活動にスムーズに入ることができた。

吹き絵の活動に際しての最大の工夫は、色水を画用紙にたらすのに用いるスポイトとして寿司の醤油入れとしてよく見かける魚型の容器を使用したことだろう。小さくて子どもたちにとって使いやすいということはもちろん、最初の「魚がはねて」の手あそびが生きてきた。しかし、スポイトとして魚型容器を使用することは指導案には書かれていなかった。

活動の導入から展開までいい流れができており、集中して取り組む子どもたちの姿が見られた。ただし、指導案の段階では十分に練られていない部分があり、より計画性を持った指導案の作成が課題となろう。

(3) 研究保育後の学生の感想

実習生は研究保育を終えた日の夕方に附属幼稚園を訪問し、クラス担任と反省会を行った。その後、今回の取り組みに対する感想をまとめてもらった。以下、抜粋してみる。

A1-1 「研究保育を終えて思ったことは本当にとっても大変だったということだけでした。折り紙にあそこまで時間がかかると思わず、指導案通りに行きませんでした。折り紙の上手な教え方、どのように声がけしたら子どもに分かりやすくスムーズにできるのかということ事前に もっと練習しておくべきでした。それと待ち時間が長過ぎて子どもたちが退屈そうにしていたのでそのあたりへの配慮ももっと考えておくべきでした。ビデオを見て反省点ばかり思い浮かびますが、担当の先生や園長先生からたくさんアドバイスをいただきとても勉強になりました。今回の失敗も良い経験になりました。教育実習に生かしたいと思います。」

A1-2 「2回の観察実習の後の研究保育では、子ども一人ひとりの様子をあまり知らないままだったので難しかった。ただ、同じ年齢でも一人ひとり違うということあらためて勉強することができ、教育実習前の心構えができて良かった。」

A2-1 「実際に研究保育をやってみて、子どもたちと活動するときの自分の視野の狭さを感じました。指導案通りに、という思いが先走り、頭の中が真っ白になってしまい、だんだん視野が狭くなっていったように感じます。今回ビデオを見てそうした自分の反省点や課題を見つけることができました。」

A2-2 「できることならもう少し幼稚園に通い、

^c「あめふりなんてつまらないよ」とみんなが文句を言っていると、「いやあ、ほんとに、いいんき」とかたつむりやかえる、あまぐもなどが部屋に入ってきて、やがてみんな雨の中で楽しく遊ぶというストーリーとなっている。

子どもたちとの関わりを多く持ち、子どもたちの姿を把握し、何より活動がスムーズに進むようにお互いに信頼関係を築くことができていたらという思いがあります。」

B1-1 「実際やってみて本当に難しかったです。担当したクラスは4歳児クラスでしたが、子どもたちには個人差があります。それをふまえて活動を考え、その活動にどうやって興味を持たせるか等々で悩みました。子どもたちに説明するとき、私たちが思わず使ってしまうような言葉（「活動」「確認」など）を使うと子どもたちにわかりにくい可能性があるため、別の言葉で説明しなければいけません。必ずしも指導案通りにいくとはかぎりませんが細かくシミュレーションをしておく必要性を強く感じました。」

B1-2 「研究保育をしてみて指導案の書き方の難しさや指導案にそって活動をするものの難しさを実感した。指導案では子どもがどのような行動をするかを想定した援助を考えておかなければいけないし、スムーズに活動ができるような方法を考えながら書かなければならないが、そのことで少しでも子どもたちの前に立つとき余裕ができるので大切だと実感した。いざ活動を始めると考えていたことも飛んでしまい、順番なども決めていたようにできなくて困った。また、その時の状況に応じた臨機応変の対応をしないで教師が困惑してしまうと子どもたちの活動もストップしてしまうということもわかった。教育実習前にこのようなことを体験できたのは大きなプラスになった。」

B2-1 「イメージしてやることと、実際子どもたちの前でやることは気持ちがまったく違っていた。すごく緊張した。導入の大切さもあらためて学ぶことができた。導入の仕方によって後の活動に大きな影響があると思った。」

B2-2 「今回2人で計画を立てることでいろいろとアイデアを出しあうことができ、とてもいい勉強になった。話し合いの中でポイントと

してお寿司の醤油を入れる魚型容器を使うことを思いつくことができた。実際の実習では自分1人で考えていかねばならないので、早くから計画を立ててじっくり考えるようにしたいと思った。」

すべてのグループが研究保育を終えたのち、教育実習事前指導の時間の中でビデオを見た。4グループすべての保育実践を見たが、時間の関係もあり、活動の導入部分などポイントを絞って鑑賞した。その後、実習生が感想を述べ、指導案チェック・ビデオ撮影担当として研究保育を実際に観察した学生が気づいたことなどを述べた。その後全員が感想をまとめた。以下、ビデオを見た学生のコメントをいくつか抜粋してみる。

(4) 研究保育の様子を見ての学生のコメント

1 「いつもいっしょに大学で勉強している子が保育をしている場面を見て、大変さを実感するとともに教育実習に向けていろいろと準備をしなければと強く思った。」

2 「観察実習の機会が少なく子どもたちのことを十分に観察できていない中での活動をした4グループに感心した。皆、落ち着いて子どもたちに接していたように思う。見習いたい。」

3 「教育実習では活動に折り紙を取り入れようと思っていたが、今日のビデオを見て折り紙の一斉指導の難しさを感じた。クラスの子どものどの程度折れるのか見極めてから何を折るのか慎重に決めていきたいと思う。担当クラスを十分観察してその年齢にあった活動を考えてやらなければならないと強く感じた。」

4 「自分の頭の中で描いているものと実際やってみるとでは大きな違いがあるということ強く感じました。頭の中ではスムーズに行くことでも実際子どもたちを前にして説明したりすると、なかなかうまく進めることができなかつ

たのではないかと思います。説明しているときに話している子や動き回る子、活動をなかなかやろうとしない子、いろいろな子どもがいたと思います。でもそれは、子どもたちの当たり前姿だと思います。そういった子どもたちにどういった対応をするのが重要だと思います。まず子どもたちをしっかりと観察して一人ひとりに合った言葉がけをするのが必要だと感じました。」

5 「4グループのビデオを見て想像していたよりも子どもをまとめるということは大変なんだということがあらためてわかった。今回は教師2人だったけど、自分が1人でやるとき大丈夫なのか、子どもたちをまとめることができるかなと不安になった。実習では子どもの様子をしっかりと観察して指導案を立てていきたいと思う。」

6 「ビデオを見て活動の導入の仕方、終わり方の重要性をあらためて学んだ。導入の仕方子どもたちの取り組みが変わってくるし、終わり方次第で印象に残るものも残らなくなってしまうように思えた。」

以上のようにそれぞれに学習成果を得て、2年生は教育実習に臨んだ。教育実習を通して各自が幼児の姿を把握しつつ指導案を立てて部分実習、1日実習を行った。

4週間の実習を終え大学に戻って来た学生に、附属幼稚園での取り組みの効果について聞いてみた。実際に研究保育を行った8人のうち5人にコメントを書いてもらった。

(5) 教育実習後のコメント

A1-1 「指導案を下書きし、先生にチェックを受けそれを清書し、実践する。そして、その後に担任の先生と反省会をする。こうした一連の流れを附属幼稚園で経験したことで、教育実習のときにも担任の先生とのコミュニケーションがうまくとれた。」

A2-1 「教育実習前の附属幼稚園で研究保育の

経験は教育実習での部分実習や1日実習の際にとっても役に立ったと思う。担当クラスの年齢が異なっていたので附属幼稚園での活動内容をそのまま生かすことはできなかったが、指導案を立ててそれを実践するというイメージができていたことは大きかった。附属幼稚園での活動では導入の言葉がけが十分でなく、活動にスムーズに入っていけなかった。その経験があったので、教育実習では導入について特に深く考えて臨むことができた。」

A2-2 「観察実習が2回しかできなかったこと、しかも随分と間をおいての観察だったことは、研究保育をする上で困難な点だった。もう少し継続的にクラスの子どもたちと関わることができていれば、個々の子どもたちの特徴がわかり、言葉がけの点などで活動を進めやすかったように思う。教育実習では2週間観察した上での部分実習（中心活動）だったので、その点ではやりやすかった。」

B1-1 「附属幼稚園での研究保育では指導案を立てていたものの実践段階ではその通りには進まなかった。もっといろいろなケースを想定して指導案を立てることが必要だと理解できたと同時に、具体的な言葉がけについて細案を立てておくべきだとわかった。教育実習ではその点に注意して指導案を立て実践することができた。」

B1-2 「附属幼稚園での自分の活動をビデオで見直し、子どもたちへの説明がとても早口になってしまっているということがわかった。なので、教育実習では気をつけることができたように思う。」

このようなコメント見る限り、教育実習事前指導としての附属幼稚園での研究保育の取り組みは一定の成果をおさめているように思われる。本学の保育者養成課程における実習計画では、2年次6月の教育実習前の段階で、幼児の姿を把握し指導案を作成し実践するというイメージを持つことは難しい。そのような経験がほとん

どないからだ。今回事前に一度経験してみると、指導案作成にいたるプロセス、指導案と実践との関係などを多少なりともイメージすることができたのだろう。研究保育で得たイメージをそれぞれの教育実習で生かすことができたようである。

3. 研究保育実践における今後の課題

学生の評価では、今回の取り組みは一定の成果をあげた。そうであれば今後も継続して実施したい。ただ、そのためには今年度の取り組みを十分に反省し、来年度に向けて改善を図らねばならない。以下、附属幼稚園側からのコメントをふまえつつ、今回の取り組みを振り返ってみての反省点・今後の課題をまとめ、検討してみたい。

(1) 観察実習の回数の問題

最初の反省点としては、研究保育を行う上での観察実習の回数の少なさである。2回の観察、しかも期間があいた2回の観察で幼児の姿を把握し指導案を作成するというのは一般的に考えて極めて困難である。

A2-2の実習生のコメントに「できることならもう少し幼稚園に通い、子どもたちとの関わりを多く持ち、子どもたちの姿を把握し、何より活動がスムーズに進むようお互いに信頼関係を築くことができたらという思いがあります。」とあった。教育実習後には同じ学生が「観察実習が2回しかできなかったこと、しかも随分と間をおいての観察だったことは、研究保育をする上で困難な点だった。もう少し継続的にクラスの子どもたちと関わることができていれば、個々の子どもたちの特徴がわかり、言葉かけの点などで活動を進めやすかったように思う。教育実習では2週間観察した上での部分実習（中心活動）だったので、その点ではやりやすかった。」というコメントを残している。

ここでのコメントにおけるキーワードは「子どもの姿の把握」である。森上・大豆生田（2004）

によれば「子どもの姿」として次の3点が考えられる。①子どもの興味や関心。（興味をもって遊んだり活動。その遊びのどのようなところを楽しんでいるのか。）②子どもの発達状況。（できるようになってきたこと、自分なりの乗り越えようとしている課題など。）③子どもの人間関係。（友だちや保育者とのかかわりのもち方など。）そして、こうした「子どもの姿」をよく把握することが指導案作成の基本となると述べられている。

観察実習を2回しかできなかった4グループは、指導案作成において「子ども姿」の把握が十分ではなかったといえるだろう。例えばA1グループであれば実習生にとって予想外の的当て遊びを子どもたちは始めたし、A2グループであれば実習生が予想していた以上に子どもたちが折り紙を折るのに時間がかかった。

観察実習機会の少なさによって「子どもの姿」の把握が十分ではなかったことについては附属幼稚園側からのコメントがある。「4グループともに十分な観察ができなかったため、指導案作成上困難があったのではないだろうか。「子どもの姿」については実習生自身がつかんで欲しい部分であり、指導案作成上の指導過程において、クラス担任が「子どもの姿」についてあれこれヒントを出すことにはためらいを感じる。できれば実習生にもう少し子どもたちを観察してもらったほうが研究保育の取り組みは効果的になるのではないだろうか。」

こうした附属幼稚園からのコメントを生かし、今後は研究保育の実践にあたってできるかぎり観察実習を取り入れたい。しかしながら、カリキュラム上困難な面もある。4～5月は教育実習のため抜けてしまう6月の授業の補講が入ってくるため、空き時間を確保することが難しい状況である。となれば、観察実習機会をより多く確保するためには、早い段階から計画を立てることが求められる。昨年度は4月になってから計画を立てたため、空き時間を確保するのが難しかった。今年度は昨年度末に計画を立てて何とか2回は確保することができたが、観察実習の回数は今後の大きな課題といえよう^d。

(2) 実践者の人数の問題

実践できる学生が少ないことも反省点といえる。今回の取り組みで研究保育を実践できたのはわずか8名(68名中)である。他の学生は、研究保育の準備に協力するし、ビデオで研究保育の様子を見ることで、自分が実践する上での課題を見いだす。学生のコメントにもあるようにそれだけでも大きな事前学習といえるが、できれば全員に教育実習前に研究保育を体験させたい。自分でやってみるのか、人がやっているのを見るのかでは大きな違いがある。しかし、全員が体験することが理想だとしても、現実的には極めて厳しい。

幼稚園に赴いての研究保育体験は難しいとして、代替案として養成校での学習方法の中で考えられるのは模擬保育である。模擬保育とは学生同士が教師役と子ども役に分かれ、教師役の学生があらかじめ作成した指導案に基づいて保育を行う教育方法である。

この模擬保育について、第一著者は平成20年度から1年次前期に開講している「教育課程概論」の中で取り入れるようにしている。この科目は教育課程の意義と編成方法を学ぶ授業であり、指導計画の学習が入ってくるので、その仕上げの意味で模擬保育を行っている。具体的に

は、約80人の学生を4グループに分け、グループごとに教師役を2名選出し、教師役が指導案を作成して実践する⁴。子ども役の学生が子どもになりきろうという意識が弱かったりして十分な内容にならないこともあるが、それでも指導案作成から実践、という流れを少しでもイメージしてもらえればと願って模擬保育を取り入れている。

模擬保育を含め、指導案作成から実践という流れを体験する機会をできるかぎり多くしていくことも今後の課題である⁵。

(3) 附属幼稚園との協働という視点

本取り組みを実践するにあたって当初思い描いていたのは、教育実習事前指導の一環としての研究保育を通して、大学と附属幼稚園で保育者養成をめぐって意見交換する一つの機会となるのではないかということだった。教育実習となれば実習期間中は幼稚園側が指導者の立場となるが、こうした取り組みでは学生に対して大学と幼稚園が協働で指導に当たることが可能である。しかし、現時点では協働という視点がまだまだ十分でない。

例えば、研究保育を実施するにあたっての指導案の作成について、そのクラスの状況を最も

⁴本学では、1年次2月に1週間の観察実習を実施しているが、このとき附属幼稚園で観察実習を行った学生に、その時に担当したクラス(年度が変わっているので持ち上がりクラスということになる)で研究保育を実践させるという方法はあるかもしれない。幼児の姿をもう少し詳しく把握した上で指導案を作成することができるかもしれない。こうした試みも来年度以降の課題としたい。

⁵21年度は「教育課程概論」の13・14回目に模擬保育を行った。4グループがイスとりゲーム、フルーツバスケット、しっぽとり、氷おに・手つなぎおにを実践した。

⁶教育実習事前指導という位置づけとはならないが、今後模擬保育あるいは附属幼稚園の幼児観察の機会は増えそうである。というのは、平成20年11月12日付けで教育職員免許法施行規則の一部が改正され、大学の教職課程において22年度より「教職実践演習」という科目が必修として設定されることが決まったからである。

「教職実践演習」は、教員としての必要な資質能力が確実に定着しているかを確認するために設けられた科目であり、4年制大学では4年次後期、短期大学では2年次後期に開講されることが原則となっている。

授業内容としては、教員として求められる4つの事項(①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項④教科・保育内容等の指導力に関する事項)を含めることが妥当であり、授業方法としては役割演技(ロールプレイング)、グループ討議、事例研究、現地調査(フィールドワーク)、模擬授業等を取り入れることが適当とされる(詳しくは平成18年7月11日中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」の中の「教職課程の質的水準の向上」の項目参照のこと)。

22年度入学生から対象となるので、本学での実際の開講は23年度となる。平成21年9月末時点でカリキュラムは最終決定していないが、模擬保育や附属幼稚園での幼児観察の機会は間違いなく増えると思われる。保育者養成課程の中で同科目をどのように生かしていくのか、今後、養成校共通の課題となるだろう。

よく把握しているクラス担任が指導するのがふさわしいが、研究保育については大学の教員がその様子を実際に見ているのであればコメントすることができる。もちろんクラス担任もコメントできる。附属幼稚園との協働的な取り組みを考えたときに、ここで学生・幼稚園・大学の三者の反省会が必要になるのではないかと。現時点では学生と幼稚園、学生と大学という二者間での反省会にとどまっているが、三者が同席することで、附属幼稚園は大学側の保育者養成のための指導法の一部をうかがい知ることができるだろう。例えば、筆者はそれぞれの研究保育に対し、すでに述べたようなコメントをつけているが、幼稚園の教員からみたら妥当なコメントといえるかどうかとも検討材料だろう。また、三者が同席することで、大学は附属幼稚園が必要としている保育者像を垣間見ることができるかもしれない。幼児を指導する際にどういった点を重視しているのかが見えてくるだろう。こうした過程を通して大学・附属幼稚園における保育者養成のあり方・目指す保育者像などが協働的に構築されていくのではないかと考えられる。

これらの点について、附属幼稚園側からは同意見を得た。「大学・附属幼稚園が保育者養成のあり方について考えを共有化していくことは、学生への効果的な指導につながるであろう」というコメントがあった。一方である提案が出された。保育者養成のあり方・目指す保育者像の構築の前提として、大学と附属幼稚園が協働して研究する機会、例えば事例研究などの機会が必要となってくるのではないかとという提案である。「事例研究を協働して行うことで、保育者の保育に対し大学側から多様な視点を提供して欲しい。保育実践に対し一定の方向づけをして欲しいということではなく、意見を突き合わせることで幼稚園・大学お互いが学び合うことができ、保育者養成のあり方もそうした学び合いの中から構築されていくのではないかと」との意見が出された。

協働の場としての事例研究は、冒頭で述べたお茶の水女子大学の取り組みでも重要な柱として取り入れられている（佐治，2007）。附属幼稚

園からの提案を含め、協働性の強化が今後の大きな課題となろう。

(4) 研究保育の到達度を振り返るための方法

本取り組みをより効果的な学習とするため、事後に到達度を振り返るプロセスを用意する必要がある。学生自身にとって反省・改善点が明確になることこそ教育実習事前指導としての意義といえる。しかし、今年度の取り組みにおいては、その点では不十分であった。

改善する上で参考になると思われるのは渡辺・河合（2006）で言及されている「改善指導案」の作成である。指導案を作成して模擬保育などを実践した後に、得られた修正点や課題を基に「改善指導案」を作成する。その過程で反省・改善点が明確になり、指導案作成の力量を身につけることが期待できるという。今年度の取り組みにおいては、4グループが作成した指導案を研究保育実践後に改善するという試みを行うことはなかった。附属幼稚園側からの指導、学内反省会での内容等をふまえながら最終的に「改善指導案」を作成していくことを今後の課題としたい。

4. まとめ

平成21年度の教育実習事前指導重点化のための附属幼稚園と連携した研究保育実践を振り返ってみた。その上で、取り組みの反省点・今後の課題を検討した。研究保育実践に対する反省点・今後の課題を検討していく中で、主に次の二点が明らかとなってきた。第一に、研究保育実践をより効果的にするためには大学・附属幼稚園による協働的な計画性が極めて重要であること。具体的には、事前の観察実習機会の確保、事前事後指導体制の整備などである。第二に、研究保育を計画する前提として大学・附属幼稚園が保育者養成のあり方・目指す保育者像などについて協働的に構想する必要があること。附属幼稚園側から提案された事例研究などが構想の場として考えられる。第二の点については、冒頭

で取り上げたお茶の水女子大学の取り組みでも重要視されており、保育者養成校と附属幼稚園の連携を考える上で共通した課題のように思われる。今回の研究保育実践を通してそのことがあらためて確認されたといえる。

今後、我々は附属幼稚園と協働して保育者養成のあり方を模索していかねばならないが、その際以下のようなことには注意を払いたい。

松本純子(2007)は現在の保育者養成短期大学の授業の内容が園で役立つ技術・技能に偏っていることを指摘しながら、それは「目先の目的に向けた対処療法的な方法」であり、「卒業後3～4年勤めるだけの短期集中型保育者養成」であるという。そして、「未来を生きる子どもの育ちにかかわる保育者を養成するのですから、私たちが現在に対処するばかりでなく、未来に目を向けて養成のあり方を探っていくことが求められているのではないのでしょうか。今すぐ役立つ技術・技能の習得ではなく、学生の一生を見通して、一人ひとりの学生の人としての成長を多角的に目指していくことが大切であると考えます。」と述べている。これは非常に重要な指摘であり、保育者養成校に対する大きな問題提起である。本学でも受け止めていきたい課題である。

今回の教育実習事前指導重点化のための試みとしての附属幼稚園との連携は、さしあたりは目先の教育実習をうまく乗り越えるための試みであったことは否定しないが、それに終わるのではなく、今後は保育者養成のあり方というテーマをふまえた附属幼稚園との協働的な連携を模索していきたい。

謝辞：本論文における取り組みは「附属幼稚園との連携による実習教育の充実化」として文部科学省、平成20年度教育・学習方法等改善支援の補助を受けて実施されたものである。取り組みの趣旨を汲み取っていただき、研究保育の機会の提供とともに、学生たちに懇切丁寧にご指導くださった附属幼稚園の先生方、そして園児たちにも深く感謝いたします。また、本取り組みに積極的に参加してくださった21年度幼児保育学科2年生の8人、そしてこの8人に準備そ

の他様々な形で協力していただいた21年度幼児2年生全員に感謝いたします。

引用文献

お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」、幼・保の発達を見通したカリキュラム開発, <http://www.cf.ocha.ac.jp/youho/report.html>

佐治由美子, お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(10)『記録を読む会』レポート—保育所と大学の協働の場として—, *幼児の教育*, 2007, 106(10), 東京, フレーベル館, 58-63.

佐治由美子・浜口順子, お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(2)「保育臨床実習」の授業改革, *幼児の教育*, 2007, 106(2), 東京, フレーベル館, 52-57.

塩崎美穂, お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(6)「総合的保育者」の養成に向けて, *幼児の教育*, 2007, 106(6), 東京, フレーベル館, 58-63.

中央教育審議会, 教職課程の質的水準の向上: 今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910/008.htm

新沢としひこ, あめあめあそぼ, 1991, 東京, 岩崎書店.

浜口順子・佐治由美子, 保育者養成カリキュラムにおける授業改革の試みとその意義—お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」による保育現場と大学の協働的カリキュラム開発研究報告, *お茶の水女子大学人文科学紀要*, 2006, 3, 141-155.

松本純子, 未来を生きる保育者の養成を目指して—保育者養成校の現状から再考する—, *幼児の教育*, 2007, 106(1), 東京, フレーベル館, 14-19.

森上史朗・大豆生田啓友編, *幼稚園実習 保育所・施設実習*, 2004, 京都, ミネルヴァ書房, 88.

渡辺一弘・河合規仁, 保育者養成のあり方に関する研究—現場の協力に基づく「模擬保育」の試み—, *全国保育士養成協議会第45回研究大会研究発表論文集*, 2006, 114-115.